

虚実の狭間

守 矢 信 明

—嘘はつかない？

—口ではね。

(映画「ヘカテ」より)

「嘘は口でつくものか」

嘘は口でつくものか。それとも心でつくものなのか。すなわち、嘘とは口から発せられた言語事実をいうのか、それとも言葉以前の心的態度をいうのか。一見したところ簡単そうに見えるが、これはなかなか説明のむずかしい問題である。そこでまず手はじめに、辞書では「嘘」がどのように定義されているかを見てみよう。Logos BordasでMensonge (嘘)の項を引くとつぎのような記述にぶつかる ([]は引用者。以下同様)。

- ① だまそうという意図のもとに口にされる、あるいは書かれる、真実とは反対のことば、ないし主張：un grossier mensonge [見え透いた嘘] ; il n'a trouvé qu'un mensonge pour excuser son retard. [遅刻の言い訳をするには嘘をつくしかなかった] —— (くだけた表現、うさんくさい事を言う相手に向かって) C'est bien vrai, ce mensonge-là? [ほんとうかい、その嘘は] —— Mensonge pieux [思いやりからの嘘] (たとえば不安を取り除いてやるために、その人のために思ってつく嘘, pieux mensongeとも言う) : en lui laissant croire que son état s'améliore, ce médecin ne ferait qu'un pieux mensonge à son malade qu'il sait condamné. [病状の改善を信じこませようと、その医者は助かる見込みのない患者にひたすらやむをえず嘘をつくばかりだ] —— Mensonge par omission [省略による嘘] (沈黙を保つことで、真実をゆがめること)
- ② 嘘をつく行為 : selon la morale chrétienne, le mensonge est un

pêché [キリスト教のモラルにしたがえば、嘘は罪である] —— (拡張的意味) Habitude de mentir [虚言癖] : vivre dans le mensonge [嘘でかためて暮らす]

- ③ (拡張的意味, まがい物について言う) : Quels mensonges que ces portraits exposes aux vitres des marchands de gravures (BALZAC) [画廊のウィンドーに並ぶあれら肖像画はとんでもないインチキだ]

他の辞書の記述もおおむね以上のようなものである (たとえば *Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse, Petit Robert, Dictionnaire du français contemporain* など)。それゆえ少なくとも現代フランス語で「嘘」という場合は、以上三つの、とりわけ①と②の二つの意味が中心にあり、おそらく同じことは日本語にもあてはまるであろう。つまり嘘には行為を示す場合と、そうした行為の結果としての主張ないし言表を示す場合がある。そして人をだまそうという意図はそれらの前提をなすが、意図だけでは嘘は成立しないことになる。

ではつぎに、いかなるものがこの定義にかなった「嘘」であろうか。例を見てみたいのだが、「嘘」の例というのはどこにも転がっていきそうで、実は見つけるのが意外にむずかしいものだという事に気がつく。そこで定義を辞書に求めたてまえ、その実例も辞書に求めてみたくなるのだが、すでに引用した *Logos Bordas* からわかるように、そこに示されているものは嘘という言葉の「用例」であって、嘘そのものの「実例」ではない。いわゆる“コト典”ならともかく、辞典である以上あたりまえ、なのだろうか。たしかに例えば「たのしみ」という言葉を人が辞書で引くのは、その言葉のもつ意味を知り、かかる意味での用例を知るためである。たのしみの実例までも辞書に教えてもらおうなどということは、不精にして怠慢もはなはだしいということだろう。しかし他方において、いわゆる国語辞典での例といえはすべて用例を指し、実例は指さないのかという疑問がのこる。もしそれで一貫しているのであれば問題は起こらないが、そうではないから話がややこしくなる。たとえば『広辞苑』で「へまむしにゅうどう」というのを引いてみると、そこには「へまむしにゅうどう」の何たるかが言葉と絵図の双方で説明されている¹⁾。これは語の用例で

はなく、実例の提示である。ほかのケースを見てみよう。『新スタンダード仏和辞典』で *métonymie* (換喩) を引いてみる。するとこれも「容器で内容を、象徴で実体を、部分で全体を表す方法」という定義とともに、「boire un verre (= un verre de vin) [グラスを一杯やる=グラス一杯のワインを飲む]、*fidélité au drapeau* (=à la patrie) [旗への忠誠=祖国への忠誠]」という実例が示されている。さらに『ロワイヤル仏和辞典』で *chiasme* および *allitération* を引いてみる。

chiasme——交差配列法，キアスム「同等関係にある2つの語群のうち後の語群の語順を前の語群のそれとは逆に配列する修辞法，例：Il faut manger pour vivre et non pas vivre pour manger. [生きるために食べる必要があるのであって，食べるために生きるのではない]」

allitération——頭韻法，疊韻法「同じ子音を近接する単語の中で繰り返して擬音的・音楽的效果を生み出す手法，例：Les sons aigus des scies et les cris des ciseaux. [ノこぎりのノノしり，ハさみのハぎしり]」

一見して明らかのように、示されているのは定義と実例であって、定義と語の用例ではない。ということはある種のものは語の用例で示され、ある種のものはその実例で示されているということになる。いったいこの区別はどこに由来するのだろうか。

これまで引き合いに出したもののうちで、「へまむしにゅうどう」は文字遊戯の一つである。また *métonymie* と *chiasme* は修辞学用語、*allitération* は詩学用語である。つまりこれらは言葉を問題にする言葉、別な言い方をするなら、言葉を指示対象 (*référence*) とするメタ言語だということができる。それにたいし、たとえば「太陽」であるとか、「雑誌」であるとか、「机」などという語は言葉以外のものを指示対象とする点で対象言語と呼ばれている。そしてこの区別がどうやら辞書において例をかかげる場合の、実例対用例の相違として現れているように思われる。あるいは逆に、用例が示されているものは対象言語、実例が示されているものはメタ言語だといってもいい。ただしこれは筆者の推定する区分であって、辞典編纂に一貫する慣行ではない。さらにこの区別は同一語のなかにも存在する。たとえば、

(a)あの花は美しい

(b)きみの「花」は鼻に聞こえる

において(a)は対象言語としての「花」であるが、(b)は「(きみが口にする)ハナという言葉」を指した、メタ言語的用法である。

こうして、調べたかぎりでの国語辞典では、「嘘」は実例ではなく用例が示されているのであるから、「嘘」はメタ言語ではなく、対象言語に属するということになる。

「対象言語とメタ言語のちがいがい」

対象言語とメタ言語のふたつを区別したのは論理学であるが、ヤーコブソンは日常的なレベルでもメタ言語的機能が頻繁に発揮されていることを強調し、つぎのような例をあげている²⁾。

発信者および/または受信者が相手と同じコードを使っているか否かを確認する必要を感じるたびごとに、発話の焦点はコードそのものに合わせられ、メタ言語的機能 (fonction métalinguistique) が発揮される。[……]

次のようならんざりする会話を考えてみてほしい。

《Le sophomore s'est coller.》《Mais qu'est-ce que *se faire coller*?》《*Se faire coller* veut dire la même chose que *sécher*.》《Et *sécher*?》《*Sécher*, c'est *échouer à un examen*.》《Et qu'est qu'un *sophomor*?》insiste l'interrogateur ignorant du vocabulaire estudiantin. 《Un *sophomore* est (ou signifie) un étudiant de seconde année》

「あのダシ、ドジッタよ」「ドジッタって?」「ドジッタっていうのは、ホサレタってこと」「ホサレタっていうのは?」「ホサレタっていうのは試験に落ちたってこと」「で、ダシというのは?」と学生用語を知らない相手はなおも訊ねる。「ダシっていうのはね、2年生のことなの」]

ここでは会話の流れを一旦中断して、知らないことばを確認する作業がおこなわれている。流れが中断するというのは、対象言語のレベルから、メタ言語のレベルに切り換わったことを意味する。だがわれわれの日常会話では、意識的であれ無意識的であれ、しばしば対象言語活動のなかにうまくメタ言語活動

を取り入れることで、親しさをいっそうましたり、あるいは滑稽な感じを増幅させたりする役割もはたしている。マリヴォーの『愛と偶然の戯れ』のなかからそうした例を二つほどあげてみよう。

Mario—Dorante me pardonne-t-il la colère où j'ai mis Bourguignon?

Dorante—Il ne vous la pardonne pas, il vous en remercie.

〔「ブルギニョンを怒らせてしまったけれど、ドラント君は僕を勘弁してくれるだろうね」「勘弁しません、感謝します」

Silvia—Bourguignon, ne nous tutoyons plus, je t'en prie.

Dorante—Comme tu voudras.

Silvia—Tu n'en fais pourtant rien.

Dorante—Ni toi non plus, tu me dis: je t'en prie.

〔「ブルギニョン、おまえ呼ばわりはよそうじゃないの、後生だから」「おまえの好きにするさ」「おまえさん、やっぱり言ってるじゃないか」「おまえだって“おまえさん”って言ってるだろう〕

対象言語はメッセージの伝達ということに主眼をおく。他方メタ言語の方は、これまでにあげたいくつかの例からも明らかのように、ことばの意味を確認したり、ことばそのものの効果を楽しむことが中心であって、伝達ということからすれば、その流れは一時中断状態にある。

先に同じ「花」という語でも、それを対象言語的に理解するか、メタ言語的に理解するかで異なる解釈が生まれるということを述べた。つまりある発話が対象言語として機能しているか、メタ言語として機能しているかで、発話は別々の意味作用をもつのである。ほかの例でいえば、たとえば「東映映画、あいた口がふさがらない」⁹⁾という発話ではふた通りの読まれ方が可能である。ひとつは「東映映画も困ったものだ、ほとんど呆れてものも言えない」というもの。もうひとつは「tooeieigaということばは、ooeieiと六つも母音が連続していて、その間、口はあきっぱなしである」というものである。前者は対象言語的な意味作用の上に成り立つ解釈であり、後者はメタ言語の意味作用に立脚している。さて前者の場合、ほんとうはヤクザ映画が大好きであるにもかかわらず、PTAの会長をしているてまえ、人にはあたかも嫌いであるかのように語る

ことにしているというケースも考えられる。その場合、その人は嘘をついていることになる。後者の場合はどうであろう。こちらは実例をかかげて、この例では母音が連続するために、調音上、口はいわば開けっぱなしの状態にあるということを述べている。事実かどうかは、即座に確かめることができる。したがってそこに嘘の介入する余地はまったくない。実物を明示している以上、嘘のつきようがないからだ。こうして、嘘が介入してくるのは対象言語としての意味作用の上にてあって、メタ言語のそれではないということがわかる。

「嘘と反用はどちらがうか」

「嘘」によく似たものに「反用」(antiphrase)がある。「反用」はメタ言語に属する語だろうか、それとも対象言語に属しているだろうか。辞書を引いてみよう。

antiphrase 【修】反用(真意と逆に語を用いること、困ったことをした者に向かってTu as fait du joli! [まあ御立派!]という類)——「スタンダード仏和」より

われわれの簡便な区分法にしたがえば、ここには用例ではなく、実例が示されている。したがって実例が示されているかぎり、少なくともこれはメタ言語であって対象言語ではないと判定できる。しかしながら内容的に反用は嘘にきわめて近い。なぜなら立派でないことをした人間に向かい「まあ御立派!」というのは、事実と反した物の言いようだからだ。そのためメタ言語、対象言語という分類上のちがいを別に、いったい両者はどこでわけへだてられているのかと、重ねて疑問がわく。そこであらためて「嘘」と「反用」のちがいを考えてみるなら、先のLogos Bordasの定義の前半、「だまそうという意図のもとに口にされる、あるいは書かれる」という部分の有る無しだということに気がつく。嘘には人をだまそうという意図が秘匿されていなければならない。しかし「まあ御立派!」の方は、物の言い方に事実と反するところがあるものの、相手をだまそうという意図はなく、発言者は単に相手の不備ないし落ち度をたしなめているにすぎない。もし人をだまそうというのであれば、そこには出来かぎりのまことらしさ、まぎらわしさがなければならず、出来事と発言内容

の距離は決してゼロにならないものの、しかしかぎりなくゼロに近いよう見せかけなければならない。ところが反用はその逆をいく。出来事と発言内容のあいだのずれは見え見えであり、くい違いはすぐそれと知れるようさらけ出されている。というのも、そもそも反用がメタ言語であるという所以は、その基本形が「ふつつなら△という言葉を使うところだが、私はあえてその反対語を使用することにより、あなたの注意を特に促す」という点にあるからだ。つまり言葉が逆だということを隠すどころか、相手に悟らせることこそ反用の使命なのである。

「恭しき大ボラ」

たとえば『ハムレット』にこんな例がある⁴⁾。

ハムレット ああ雲が見えるかな、それ、向うのらくだの恰好をしている？

ポローニウス なるほど、いかにもらくだのようで。

ハムレット いや、いたちに似ているぞ。

ポローニウス さよう、背中あたり、確かにいたちに似てますな。

ハムレット 待てよ、鯨のようではないか？

ポローニウス おお、鯨そっくりで。

ハムレット よし、すぐ母上のところへまいる。(横を向いて) 寄ってたかって、人を馬鹿にしている。

ここでは、宰相ポローニウスが王子ハムレットの言いなりになっている。王子がらくだと言えばらくだ、いたちと言えばいたち、王子が再度修正して鯨と言えれば廷臣の方は恥じることもなく鯨と繰り返している。ハムレットの態度には相手へのからかいがあるとはいえ、一応、「あの雲は何にたとえたらよからうか」という自問するスタイルで一貫している。しかしポローニウスの方は、一度ならず二度までも、いや二度ならず三度までも、断言した舌の根がかわかぬうちにもう前言をひるがえしている。ハムレットの台詞を縮約すれば「あの雲はらくだみたいだ。いや、いたちかな？待てよ、鯨にもみえるぞ」となっており、不自然さは感じられない。しかしポローニウスの方は「あの雲はいかに

もらくだで、たしかにたちで、鯨にそっくりだ」と支離滅裂になってしまう。彼は口をひらくたびに前言をひるがえす証人のようなものだ。

さて、ポローニアスの態度はふつうなら口から出まかせの大ボラフキといって指弾されるべきははずのものだが、この場合は事情がちがっている。実はポローニアスは出鱈目を「言っていない」のである。彼は王子の言葉を「繰り返しているだけ」なのだ。おうむのように逐一繰り返すことによって、「私はあなたの下される判断に何ひとつ逆らっていません」という恭順の意を表明しているのである。もしここに一言でも主体的な判断をにおわせる台詞がくわわるなら、彼はたちまちただの大ボラフキに転落するであろう。ハムレットはまさにそれをねらっていた。だから彼は判断を求めた。しかし相手はその意図をたくみにかわした。判断を求められながら判断を下さず、かつ家臣として恭順の姿勢をまっとうするには、人のよさそうな顔をして主君の判断をそのまま繰り返せばよかったのである。こうして発言そのものは支離滅裂であっても、ポローニアスは嘘や出鱈目の罪から免れている。そして、「真実とは反対のことば、ない主張」をおこなっているにもかかわらず、それが嘘と一線を画しているのは、「だまそうという意図」のかわりに「恭順の意」が示されているからだ。こうして嘘にはますます、人をだまそうという意図が必須の前提であるということになる。

「意図せざる嘘はあるか」

これまで見てきたところから明らかなように、「嘘」というからには、単に発言が事実とくいちがっているというだけでは不十分である。すなわち「嘘」には「だまそうという意図」が必要だ。『嘘の言語学』の著者ヴァインリヒによるなら、これはアウグスチヌスの嘘の定義とも一致する⁹⁾。

嘘は、違う様に述べる事が、意識的な欺瞞の意図と一緒にしている場合に、はじめて存在する。ここからアウグスチヌスの有名な定義が出てくる。「嘘とは、いつわりを言う意志をともなった陳述である。」スコラ哲学はこの定義をとり入れ、それをヨーロッパ哲学に遺産として残した。まさにヨーロッパ哲学の遺産が、*Logos Bordas*のようなフランス語辞典にも反

映して生きているということだろうか。それはさておき、では今度は嘘の重要な要件である「だまそうという意図」がなければほんとうに嘘はなりたたないものかどうかを検討してみたい。

ヴァインリヒはいま触れた著書のなかで、ベルトルト・ブレヒトの『コーカサスの白墨の輪』のなかの、領主の妻を引き合いに出している⁶⁾。この妻はあるとき「私は素朴で実直な心を持った民衆を愛しているわ」と述べるのだが、しかしこの発言は嘘であるとヴァインリヒは判断する。なぜなら彼女の行動は彼女の発言をことごとく裏切っているから、というのだ。話題にされていることがらをより明らかにするために、ここで戯曲のその問題の場面を確かめておこう。『コーカサスの白墨の輪』は生みの親である領主夫人と、育ての親である女中が、どちらが本当の母親であるかをめぐって裁判で争うという筋立てである。問題の場面は、領主夫人が法廷に登場する第六場に集約的に現れる⁷⁾。

領主夫人が、副官と二人の弁護士を伴って入ってくる。

領主夫人 有難いことだわ、少なくとも民衆がいないのはね。私はあの臭いを我慢できないのよ、とたんに頭痛になるんですもの。

第一の弁護士 お願いしますよ、奥方。別な奉行になるまでは、おっしゃることすべてを、できるだけ慎んでいただきたいですな。

領主夫人 でも私は何一つ言っていませんよ、イロ・シュボラツェ。私は素朴で実直な心を持った民衆を愛しているわ、ただ臭いが私に頭痛を起こさせるだけよ。

第二の弁護士 傍聴人はほとんどおりますまい。住民は城外の騒動のために、戸を閉ざして引っ込んでいますからな。

領主夫人 あれが本人なの？

第一の弁護士 お願いですから、奥方ナテラ・アバシュウィリ、大公が新しい奉行を任命されて、われわれが現在の奉行から縁が切れるまでは、あらゆる毒舌をお控えください。何しろ今まで奉行のガウンを着た者のうちで、最も下賤なやつと言っても過言ではありませんからな。そろそろ事態が動きだしたようだ、ごらんください。

この場面でヴァインリヒが特に注目するのは、領主夫人の「私は素朴で実直な

心を持った民衆を愛しているわ」という発言と、その発言を裏切る彼女の態度・行動である。いちどはヴァインリヒも、あるいは彼女に嘘をつく意図はなく、自分自身に思い違いをおかして、「自分は民衆を愛している」と実際に思い込んでいるのかも知れないとする。しかし最終的には、そもそも心のなかの「意図」などどうして確かめることができようか、心のなかをのぞきみる事ができないからには、その発言の真偽はその態度・行動の真偽によって判断するほかはないではないか、という結論に導かれることになる⁹⁾。

私達はそれをかなり広い文脈の中にある矛盾から推定する。つまり、領主の妻は法廷につれて行かれ、貧民の臭いに反射的に跳びすさる。いま述べた告白のあとで、彼女は更に続けて言う。「私に偏頭痛を起こさせるのは、臭いだけです。」それから彼女の視線は、あとで白墨の輪で良き母親である事が実証されるグルーシュの上にとまる。「これがその本人ですか」と彼女はたずねる。民衆とその素朴で実直な心を愛する人ならば、そんな風にたずねないものである。

彼女の示した態度・行動は、「私は（素朴で実直な心を持った）民衆を愛している」という陳述にもかかわらず、「私は（素朴で実直な心を持った）民衆を愛していない」という文に相当するとヴァインリヒは言う。この後の文は言われないで終わった。言われないで終わったが、事実上、彼女は「二重の陳述」を行なったにひとしく、そのことがすなわち「嘘」のしるしであるとする⁹⁾。

アウグスチヌスは、偽りの意図が嘘の文の背後に存在する時に、嘘は存在すると見なした。それに対して言語学は、（言われた）嘘の文の背後に、それと矛盾する、つまり、イエス・ノーの主張形態素（モルフェーム）だけ相違する（言われざる）本当の文が存在する時に、嘘は存在すると見なす、すると、アウグスチヌスが言う様に、「二重の思念（コギタチオ）」が嘘のしるしではなく、「二重の陳述」が嘘のしるしである。

アウグスチヌスの「偽りの意図」と、ヴァインリヒの「（語られざる、もうひとつの矛盾した）陳述」とがどちらがうのか、そこのところがもうひとつはつきりせず、必ずしも明快な結論とは言いがたい。それにもかかわらず、ある人物が同一事項にたいしイエスとノーの「二重の陳述」を行なったとき（ヴァイン

リヒは「行なったとき」ではなく、「存在するとき」と注意深い言い方をしているが)、かれは嘘をついたことになるという主張は、傾聴すべきものがある。というのも、この視点は単なる思いちがいや反用のように、事実には反するがさりとて人をだますことを目的としない発話行為と、だますことを目的とした発話行為、すなわち嘘とを区別するからだ。たとえば旅行者に道を聞かれたとき、私の心にだまそうという意図があれば、そのときの私には「この道をいけば駅に行かない」という判断(文)が存在するうえで、なおかつ「この道をいけば駅に行く」と発言するはずである。しかし、だまそうという意図がなく、単なる勘違いから「この道をいけば駅に行く」と言った場合、そのときの私にはもうひとつの判断(文)がはじめから存在していないのである。

「話者の態度」

嘘についてのヴァインリヒの定義は、「イエス・ノーの主張形態素のみが相違する、二つの文の同時存在」ということになる。分かりやすく言えば、「～だ」という文と「～でない」という二つの文が同時に存在すれば、それが嘘のしるしだというわけである。したがってイエス・ノーの主張形態素という耳新しい概念も、分かりやすく言えば、たとえば日本語の「～だ、～である、～だと主張する」などがイエス形態素の具体例であり、その否定形である「～ではない、～ではないと主張する」などがノー形態素の具体例だということになる。ところでこの分析はフランスの言語学者、シャルル・バイイの文の分析を思い起こさせる。バイイは思考についてこう述べている⁹⁾。

思考 (penser) とは、表象 (représentation) にたいしてこれを認証し、評価し、または欲求しつつ反応することである。

したがってそれは、あるものがある、またはないと判断することであり、あるいはそれが望ましいまたは望ましくないと評価することであり、あるいはそれがあつた、またはないことを欲することである。ひとは雨がふっていると〈信じる〉か、〈信じない〉か、〈うたがう〉かであり、ひとは雨がふっていることを〈悦ぶ〉か〈悲しむ〉かであり、ひとは雨がふることを、またはふらないことを〈願う〉のである。

このような思想を伝達する、できるだけ単純な形式が文である。そして思想の伝達がとりうるもっとも論理的な形式は「感覚、記憶または想像からうけた表象と、それを扱う主体の心的操作とをはっきり区別するような形式」でなければならないとし、表象を示す部分を〈dictum〉(事理)、思考主体の操作を示す部分を〈modus〉(様態)と名づける。これらがすべて表現されたものを外顕文といい、その一例をあげると

Je crois *que* tu mens.

がそれで、《Je crois》(私は思う)が様態の部分、《tu mens》(君が嘘をついている)が事理の部分、*que*は両者のつなぎである。いまここに示された外顕文が唯一の表現形式ではない。現実にはいちいち「君が嘘をついていると私は思う」などという論理的、分析的形式のものの言い方をしていたのでは重苦しくてならない。そこで人はもっと内顕化した言い方、たとえば「君を嘘をついていると思う」、「君は嘘をついている」、「嘘おっしょい」、「嘘つきめ」、のように、もっと内顕化し、簡便化した言い方をする。しかし伝えたい内容は外顕文も内顕文も申し分なく伝えている。

以上の説明とヴァインリヒの説明を重ねるなら、嘘とはひとつの様態動詞にたいし肯定形と否定形が同時に存在する場合を言うということになる。そしてこれが嘘をモラルの点からではなく、言語現象としてとらえた場合の説明である。なるほどモラルの上からすれば、嘘は人の心の弱さがなせるわざかも知れない。しかし言語学の視点からすれば、嘘は言語が人に許しあたえている一形式にすぎない。「考えてもいないことを、口がしゃべる」(ヴァレリー)のも、あるいは「主体が思ってもいないことを自己の思想として表明する」(バイイ)のも、それは言語のなかにそれを可能にする仕組みがひそむからだ。もしそうしたことを避けなければ、バイイが文の塊 (*l'âme de la phrase*) とまで呼ぶ様態部分を剝奪した、別の記号体系をつくりだすほかない。事実、科学のコトバや、数学のコトバはそのような目的にかなうべく考案された記号体系である。それらはメッセージの伝達も行うが、同時にそこで使われる記号がいつでも自己検証を受けられるようメタ言語的機能も負わせられている。

「ちみもうりょうの世界」

言語の世界では、嘘っぱちも、本当のことも、受け取りマシタも、受け取りマセンも、みな同等に肩をならべて存在するのだということをひとたび認めてしまえば、われわれは随分と気楽にしたことにならないだろうか。この世界では河童、鬼、ぬえなど、現実には存在しないものも、堂々と市民権をえて存在している。これらはいずれも言語の世界であればこそ存在しうる言語的実体だ。絶世の美女ですら、言語の世界ではいとも簡単に、かつ誰の手にも届くものとして出現する。三島由紀夫は「小説第一の美人は誰か」という問いにたいし、つぎのように答えている¹⁰。

これはごく易しい質問です。文章における小説第一の美人とは、もしあなたに小説を書いて「彼女は古今東西のなかに現れた女性のなかで第一の美人であった」と書けば、それが第一の美人になるのです。言語のこのやうに抽象的性質によって、小説中の美人の本質が規定されます。

こうして読者の想像力によって造形された美女は、生身の女性以上に生命力をえてかれの脳裏に生きつづけるかも知れない。臨終のときのバルザックは自らの作中人物である医師ビャンションの名を口にし、かれさえ来てくれるなら助かるのにとうわごとを言いつづけたという。

「言語にあってしぐさがないもの」

われわれは本当のことも本当でないことも、すべてことばによって伝えられている。そのために真実を告げるとか、告げないという問題を、ともすればすべてその人間の人格の問題に帰してしまいがちである。しかしながら言語は必ずしも客観世界を忠実に描出するようにはできていない。白いという色はあるが、白さになると言語だけのものである。いや厳密には「白い」という色の状態さえ現実とは無縁のところまで定義されたものだ（白葡萄酒は、実際には淡黄色だし、白うりは薄い緑である）。井上ひさし氏は、言語にあって、事実の世界にないものの代表に「否定」と「接続言」の二つをあげている¹¹。

言語のもっとも注意すべきところは、《事実の世界に存在しないものごとについて語り得る》ということにあるだろう。たとえば、事実の世界

には否定がない。曇り空。事実の世界では、曇り空は曇り空、曇り空以外のなにものでもない。しかしわれわれは、「晴れていない」,あるいは「雨ではない」と、否定を用いて表現することができる。さらには「雲っていないこともない」というふうにも言える。[……]

接続言もまた事実の世界にはないものの代表である。人間の内部にしかなく、しかもやがて事実の世界を動かす。名詞や動詞などは事実の世界と人間の内部とに跨がっているけれど、接続言はまったくその出づがちがう、事実の世界になにひとつ対応するものがない。人間の思考を導き、押し進めるためののみ、それはある。[棒線、原文のまま]

実際、「事実の世界にないものの代表として, 否定と接続言の二つがある」という奇妙な言い方ができるのも言語ならではである。また接続言は井上氏も言うように現実には存在しないが、「人間の思考を継承し、ときには屈折させ、転換させる」ためのものだ。《私は死ぬ》も、《私は思う》も、《私は存在する》も、それ自体はとりわけてすぐれた名言でもなければ、記憶に長く残る発言でもない。だれでも一生のうちに少くとも10回や20回は口にするありきたりの文である。しかしこれらが接続言の力で結び合わされるとき、時として世界中の中高生が長く記憶にとどめるであろうような名言を生むことになる。曰く「我思う、故に我あり」、曰く「生きるか死ぬか、それが疑問だ」。

否定が言語だけのものであることを、野村雅一氏はしぐさとの関連で指摘している。氏はしぐさや身ぶりには否定形も時制もないと述べる¹²⁾。

ところで、このようなアナログ型の記号である身体動作は、それと表裏関係にある特徴として、否定形をもたず、時制もあらわしえないということがある。否定形や、時制はおそらく言語の獲得と不可分に関係しているのであるが、しぐさや身ぶりはひたすら現在のなかに、それ自身をえがきだす。したがって、「～しない」(あるいは「～でない」)ことをしぐさであらわそうとすれば、ほかの、たいていはそれと反対の「何かをする」(あるいは、反対の「何かである」)ことによるか、それとも否定しようとすることをやりかけてやめるかするほかない。

氏はベイトソンを引きながら、イヌがどのようにして「喧嘩はやらないこと

にしよう」というメッセージを交換するかについて述べる。それによるとイヌはまず歯をむきだし、うなり声をあげて喧嘩の態勢をとることからはじめるのだという。「喧嘩をやろう」というつもりなら、そのまま噛みあいになるだろうが、「喧嘩はやらないよ」というときは、歯をむきだすのも、うなるのも、すべて試験的なものであることが確認されて終わるのだという。あるいはアンダマン島の人々は、なぐりあう「真似」をすることによって、なぐりあわない関係（和解）を確認するのだという。これらはことばを用いずに、しぐさで否定を表現する場合の例である。

ところで言語は否定を表現する方法をふんだんに持ち、それらを自由に駆使するばかりか、イヌの友好関係樹立の方法や、アンダマン島人の和解の方法と同じ表現法もまたもちあわせている。つまり条件法である。フランス語で《Je mords》といえば「私は噛みつく」だが、《Je mordrais》となれば「もし事情がことなれば」噛みつくだろうに」であって、事実上噛みつかないことの表明である。あるいは《Je t'aime》なら「愛している」だが、《Je t'aimerais》なら「できることなら愛しますものを」という丁重な愛の拒絶である。ラファイエット夫人の『クレーヴの奥方』の中に「手紙」という一節がある。この手紙は「私の態度の変化が私の移り気のせいであるかのように、このままあなたに思わせておくには、私はあまりにも深くあなたを愛しすぎておりました」(Je vous ai trop aimé pour vous laisser croire quel changement qui vous paraît en moi soit un effet de ma légèreté;) ¹³⁾という書きだしで始まる。実はこの手紙は男への情熱がさめたことを知らせる三くだり半なのだが、しかし心変わりの結果、その原因はあなたへのあまりにも深い愛だとする巧みなレトリックにつらぬかれている。一言に要約すれば、「あなたが大嫌いになりましたのも、もとはといえばあなたをあまりにも深く愛していたゆえなのです」という論理である。身ぶり手ぶりだけではとてもこの複雑な論理を伝えることはできまいと思われる。

「虚実の狭間」

いろはがるたの「う」は、嘘からでたまことである。嘘のつもりがたまたま

本当のことになってしまったという意味である。これと似たものに冗談から駒というのものもある。どちらも予期せぬ喜びの場合に使われ、あまり不愉快な場合には使われない。それと同時にこれらの諺は「たまたまそういうことがあるものだ」という偶然性に重きをおくことで救われている。ところでつぎのような場合を、われわれはどう受け止めればよいのだろうか。

ランドリアーニ閣下は卓（すぐ）れた精神を持ち、第一流の学者ですが、ただ一つの弱点があります。つまり人に愛されたいという欲望です。だから彼を見たら感動を面（おもて）に現し、三度目の訪問のときには本当に愛しておしまいなさい。そうすればあなたの生まれも手伝って、すぐ可愛がられるようになります¹⁴⁾。

(Monseigneur Landriani, esprit supérieur, savant du premier ordre, n'a qu'un faible, *il veut être aimé*: ainsi, attendris-toi en le regardant, et, à la troisième visite, aime-le tout à fait. Cela, joint à ta naissance, te fera adorer tout de suite.)¹⁵⁾

これはスタンダールの『パルムの僧院』で、主人公のファブリスに叔母のサンセヴェリーナ公爵夫人が出世の知恵をつけている場面の台詞である。このなかの「三度目の訪問のときには本当に愛しておしまいなさい」ということばが、一読者の筆者にある種の目まいを起こさせる。この場合の愛は「嘘」なのか、「まこと」なのか……。『遊女のまこと』¹⁶⁾には、遊女という前提がある。つまりまことを売り物にして客をよろこばせるという前提である。しかしこの場合のファブリスは「イタリアーの美男子の一人」でありながら、「こうした年にも似合わず、彼は恋を知らないということができ、そのためますます女から愛された」という、幸福にして純真な青年である。その青年に向かって世故にたけた叔母は「三度目には本気で愛してしまえ」と言う。tout à faitは「完全に、すっかり」という意味だから、これを上の訳のように「本気で」といっても同じことである。では小説では、はたしてどのような形の「愛」として描かれているのだろうか。ファブリスはさっそくランドリアーニ大司教の館に馳せつける。かれはもともとミラノの大貴族デル・ドンゴ家の次男なのだが、このときはただ「ファブリスという若い僧が来た」としか伝えられず、面会までに45分間ま

たされることになる。大司教はちょうどあまり品行のよくない一人の司祭を呼びつけて叱っているところであった¹⁾。

その司祭をいちばん下の控室まで送って行った帰りに、「何かご用ですか」と聞きながら、ちらと紫色の靴下を見、ファブリス・デル・ドンゴの名を聞いたときの、繰り言と絶望をどう描いたらいいだろう。万事わが主人公にあまりうまく行ったので、この最初の訪問から、彼はあえて愛情をこめてこの聖者の手に接吻したぐらいである。大司教は「デル・ドンゴ家のかたを控室でお待たせするなんて!」と何度もなさない声で繰り返した。申し訳に例の司祭の話をくどくど繰り返し、その過失や答弁の様子まで述べるのだった。

結果は以上の通りである。ファブリスが大貴族だと知っただけで、この一流の学者にして高僧は、みずからファブリスの前にひれふしてきた。話はどうやらあべこべになり、ファブリスはこの最初の訪問早々からすっかりやさしい心持ちになって、大司教閣下の手に接吻をしたぐらいだと作者は述べている。この話題についてはそれきりで、あとは触れられることなく終わっている。

注

- 1) 新村出編『広辞苑』、岩波書店、「へまむしにゅうどう」の項を参照。
- 2) Roman Jakobson, *Essais de linguistique générale*, Trad. N. Ruwet, Les éd. de Minuit, 1963, p 220
- 3) 金田一春彦『日本語』、岩波新書、昭和32年1月、76頁を参照。同書で金田一氏があげている例は「東映アワー——あいた口がふさがらぬ」であるが、本論ではその一部を変えて使わせていただいた。
- 4) シェクスピア『ハムレット』(福田恆存訳)、新潮文庫、昭和42年9月、107頁
- 5) ハラルト・ヴァインリヒ『うその言語学——言語は思考をかくす事ができるか』(井口省悟訳)、1973年10月、大修館書店、12頁
- 6) 同書、63頁以下
- 7) ベルトルト・ブレヒト『コーカサスの白墨の輪』(『ブレヒト戯曲集 第五巻』所収、1962年3月、岩淵達治、内垣啓一訳、白水社)

ここの引用箇所のうち、領主夫人の《Ich liebe das Volk mit seinem schlichten geraden Sinn》という台詞に対し、『うその言語学』の訳者である井口氏は「私は素朴で実直な心を持った民衆を愛しているわ」と訳し、他方、『プレヒト戯曲集 第五巻』の訳者である岩淵、内垣の両氏は「私は民衆の素直で、真っ直ぐな心は好きだわ」と訳している。本論では論述の必要上、訳を統一しなければならず、ここでは岩淵、内垣訳の引用であるにもかかわらず、この部分にかぎり井口訳をあてはめさせていただいたことをお断りしておく。

- 8) ハラルト・ヴァインリヒ、前掲書、66頁
- 9) シャルル・バイイ『一般言語学とフランス言語学』（小林英夫訳）、1970年8月、岩波書店、27頁以下
- 10) 三島由紀夫『文章読本』、中央公論社、昭和34年6月、195頁
- 11) 井上ひさし『自家製 文章読本』、新潮社、昭和59年4月、78頁
- 12) 野村雅一『しぐさの世界 身体表現の民族学』、日本放送出版協会、昭和58年1月、119-120頁
- 13) Madame de Lafayette, *LA PRINCESSE DE CLEVES*, Flammarion, Paris, 1966, pp 97-99
- 14) スタンダール『パルムの僧院』（『世界の文学9 スタンダール』所収、昭和40年5月、大岡昇平訳、中央公論社、119頁）
- 15) Stendhal, *LA CHARTREUSE DE PARME*, Flammarion, Paris, 1981, p 161
- 16) 上野千鶴子「めうと事して遊ぶ此里」（『言語生活』1987年4月号所収、筑摩書房）
- 17) スタンダール『パルムの僧院』（前掲書、120頁）